資料

五郎兵衛記念館
古文書調査報告会

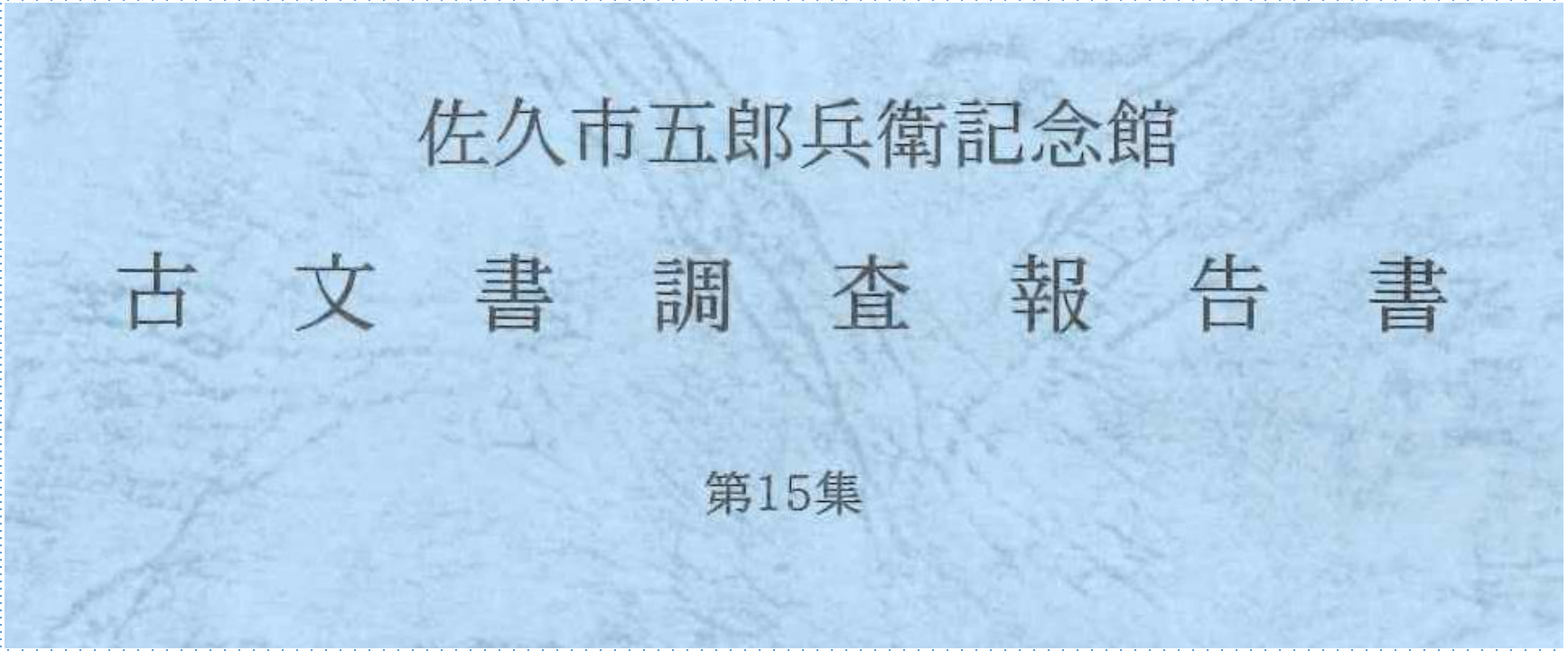
「用水を守ってきた歴史をたどるⅢ」

令和4年9月4日

山浦　修一

古文書調査報告書第15集は、古文書目録第二集の用水・普請について第13集、14集に引き続き翻刻しました。

古文書目録第二集は、冊子文書であり、一つの文書は多量の史料となるが、普請来歴が過去に遡って追え、用水の歴史をたどることができます。



本翻刻内容は、普請箇所付帳・溜池仕替仕様帳・御触書・普請仕来書上帳・普請出来形帳などです。

普請箇所付帳には、どの場所で、どのような普請（例えば石積・枠建・合掌枠・岩切込など）がおこなわれたか記載されています。

その内容は、用水取入口から下ノ宮までは鹿曲川と近く、また崖の上を用水が通っているので、大雨・山崩れなどで用水堰が壊れるため、常に補強が必要で石積・枠建・合掌枠が作られています。

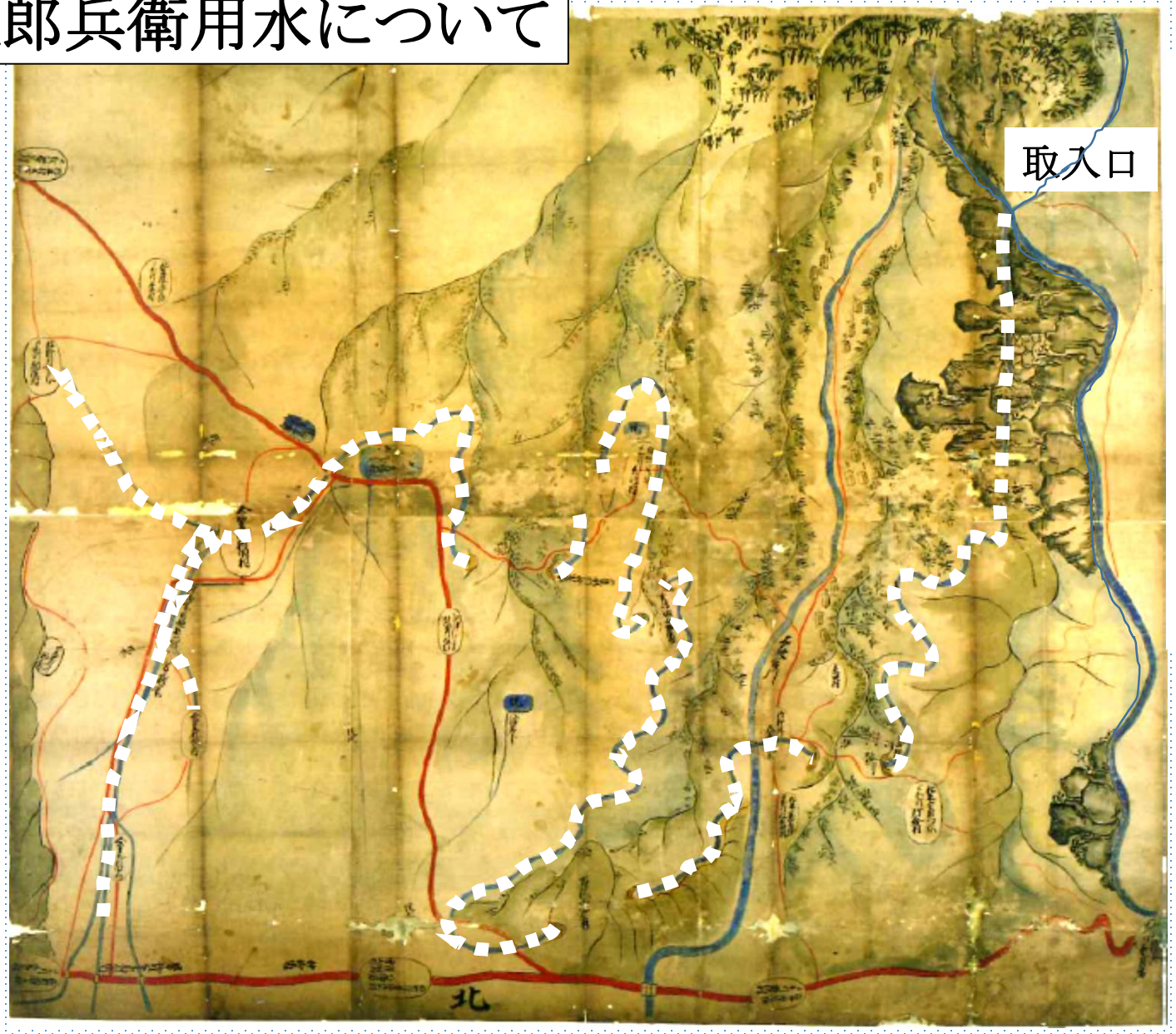
また、川については、布施川も蛇行して用水堰に近い箇所（曲り渕、牧布施前）は、大水になると用水堰に流れが当たるため、同様な普請が常に行われていました。

他に、百沢堀貫では、蓬田村用水と近いため、蓬田村用水が布施川の大水で破壊されそうになると、百沢山側に近づき堀貫の壁が薄くなってしまうので、岩切込が必要になりました。このように場所ごとに普請内容を変えて用水が止まらないよう、村人全員で用水を守ってきたことを知ることができます。

本報告会では、どのような場所でどのような普請が行われたかについて報告します。

1. 五郎兵衛用水の普請場所について、五郎兵衛記念館報第18号（1997年）佐藤敬子作成の用水略図より検討しました。
2. 普請内容について、古文書および絵図等を参考に検討し、また構造物イメージを添付します。

五郎兵衛用水について



正徳2年(1712)頃の五郎兵衛用水絵図

五郎兵衛用水は、江戸初期に完成した全長約20km(完成当時)の用水です。

市川五郎兵衛(現群馬県出身)が、小諸藩から寛永3(1626)年に許可を得て、5年ほどかけて「矢嶋原」と呼ばれた原野に用水をひきました。そしてそこに五郎兵衛新田が生まれました。

～五郎兵衛記念館パンフレットより引用～

1. 五郎兵衛用水路と普請場所

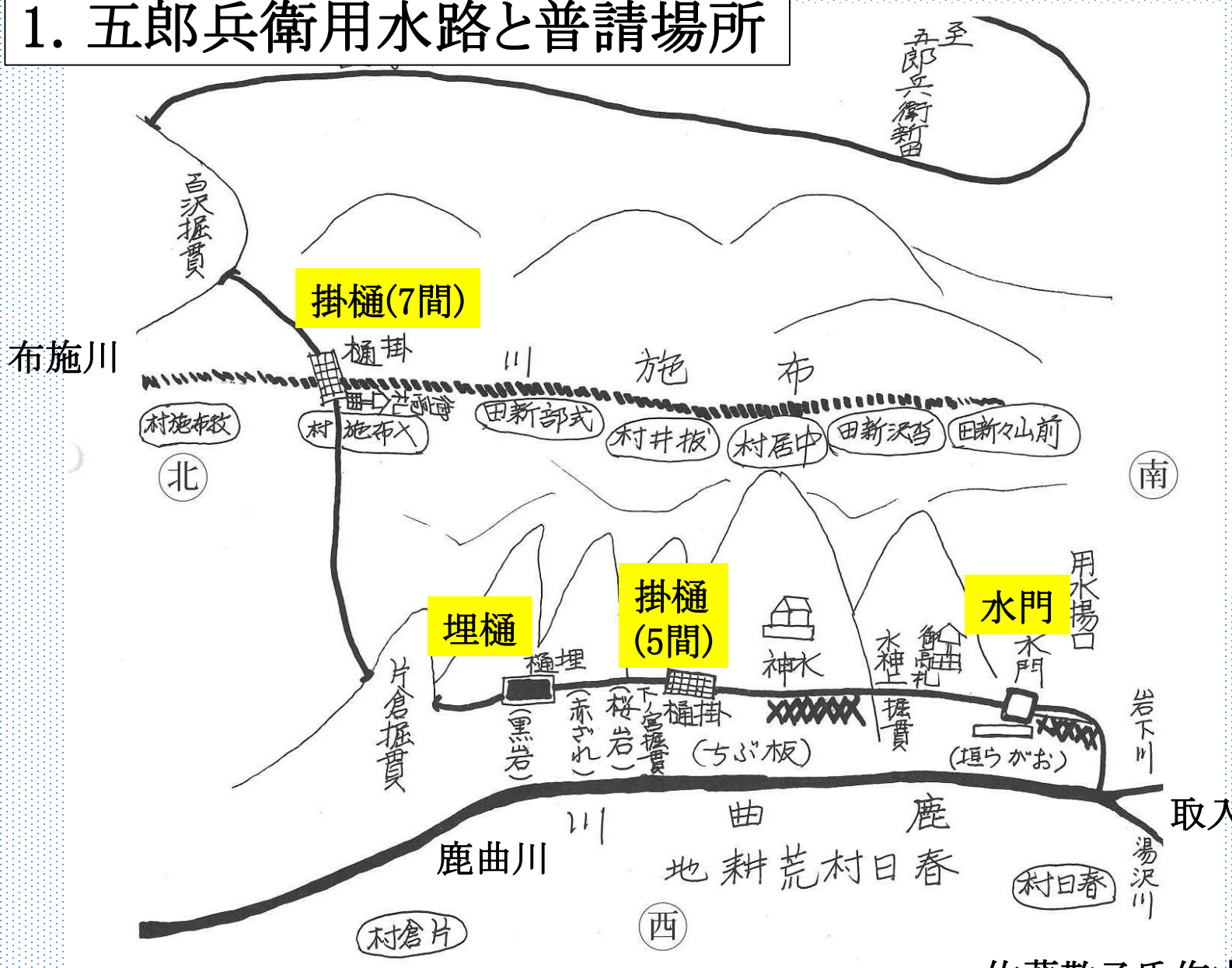


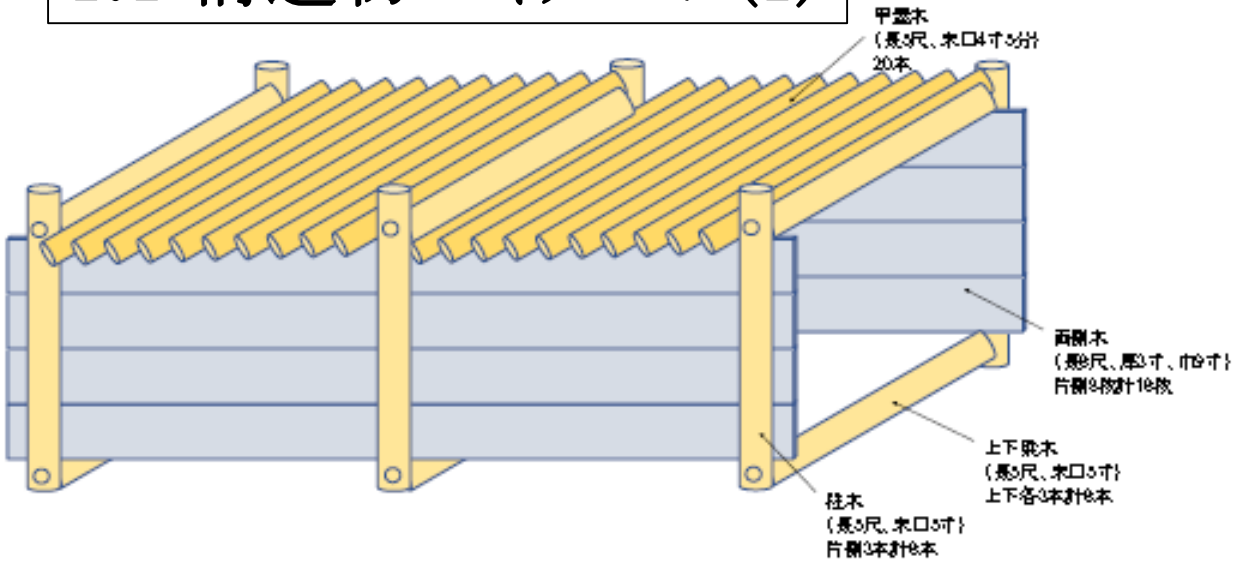
図１　安政３年五郎兵衛新田用水路略図（部分）

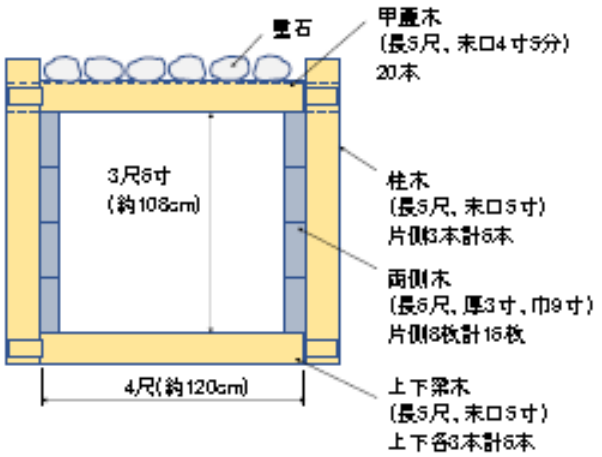
～佐藤敬子氏作成の用水略図～

用水は取入口から、水門・堀貫・掛樋・埋樋などを通り、布施川を渡り五郎兵衛新田へ到達します。

地名は、おがら垣、板ぶち、桜岩、赤ざれ、黒岩と村人が独自に名付けていました。

1.1 構造物のイメージ(1)



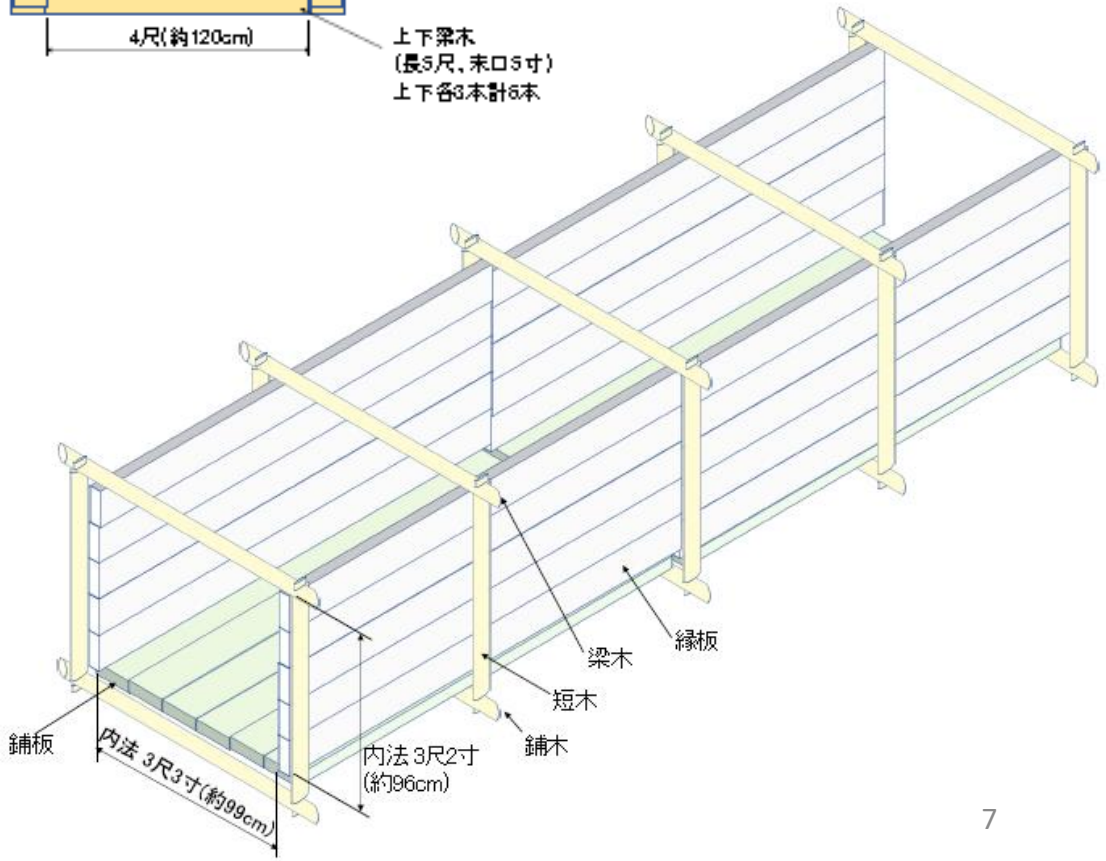


掛樋(5間)

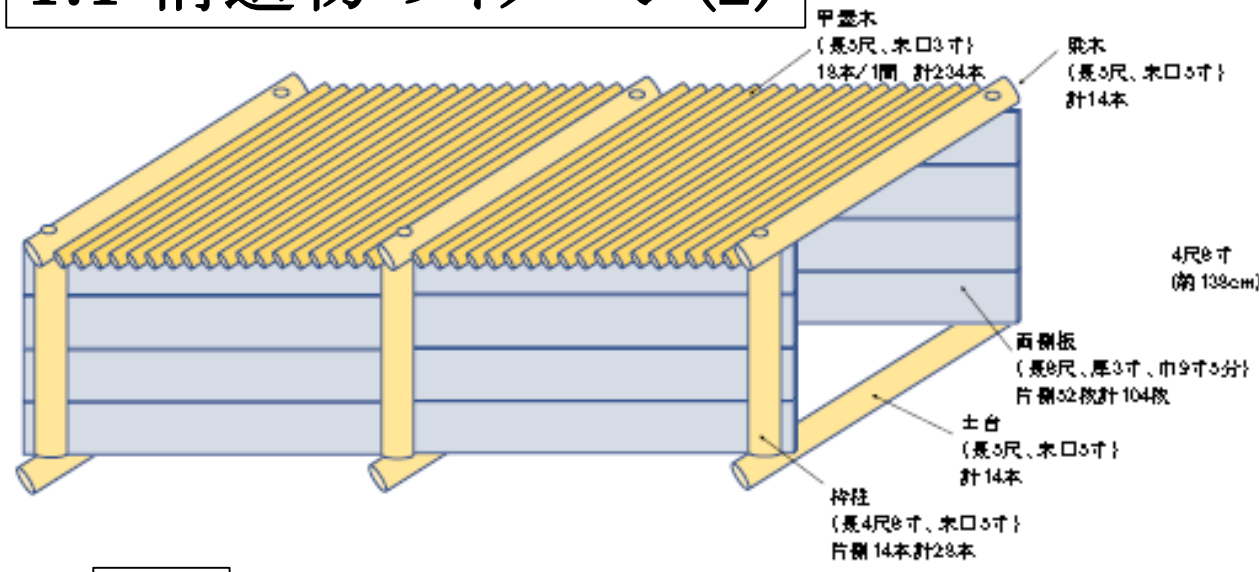
大きさ
長さ:5間(約9m)
深さ:3尺2寸(約96cm)
横　:3尺3寸(約99cm)
＊古文書H3149より

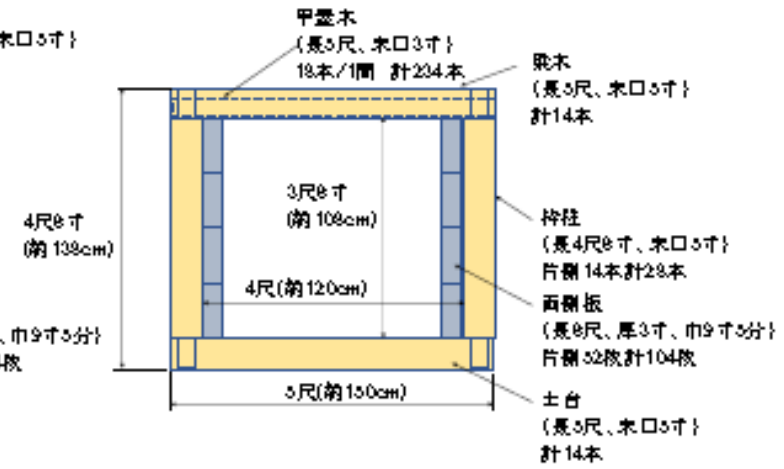
水門

大きさ
長さ:11尺(約3.3m)
高さ:3尺6寸(約108cm)
幅　:4尺(約120cm)
＊古文書H3238より



1.1 構造物のイメージ(2)



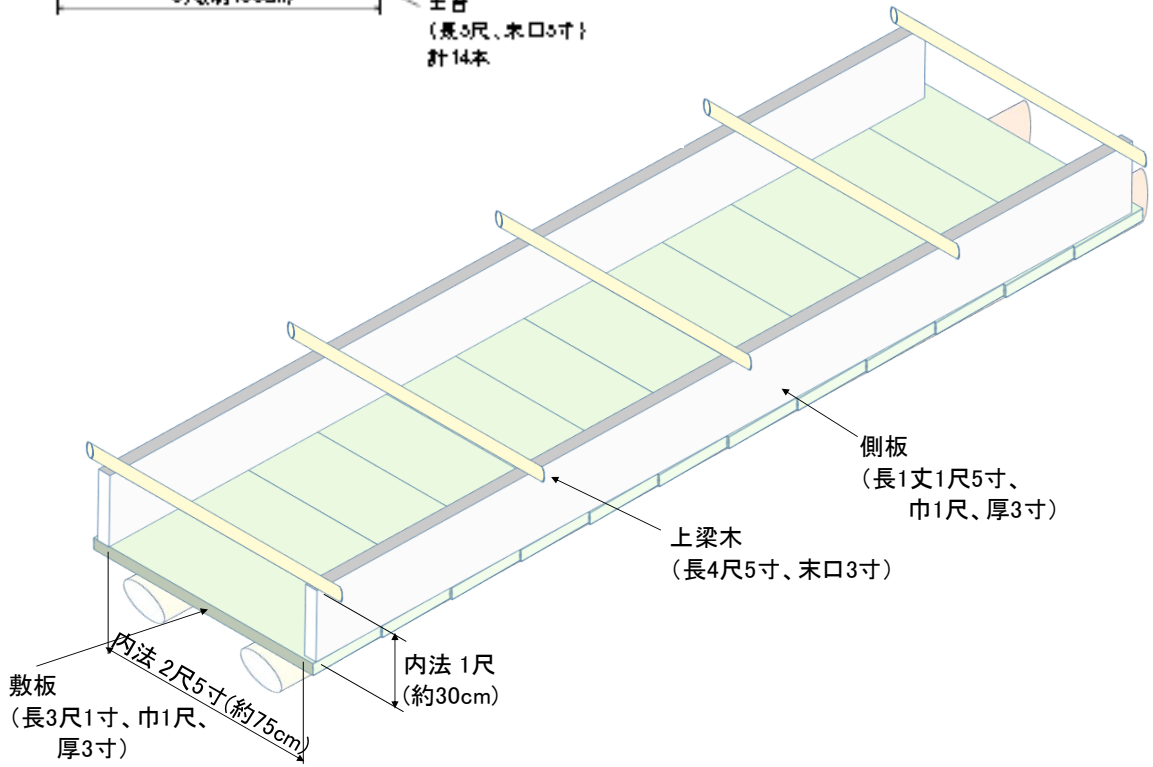


掛樋(7間)

大きさ
長さ:7間(約12.6m)
深さ:1尺～1尺5寸
(約30cm～45cm)
横　:2尺5寸(約75cm)
＊古文書H3150より

埋樋

大きさ
長さ:13間(約23.4m)
高さ:3尺8寸(約114cm)
幅　:4尺(約120cm)
＊古文書H3440より



2. 五郎兵衛用水と普請場所(1)

鹿曲川と五郎兵衛用水の関係

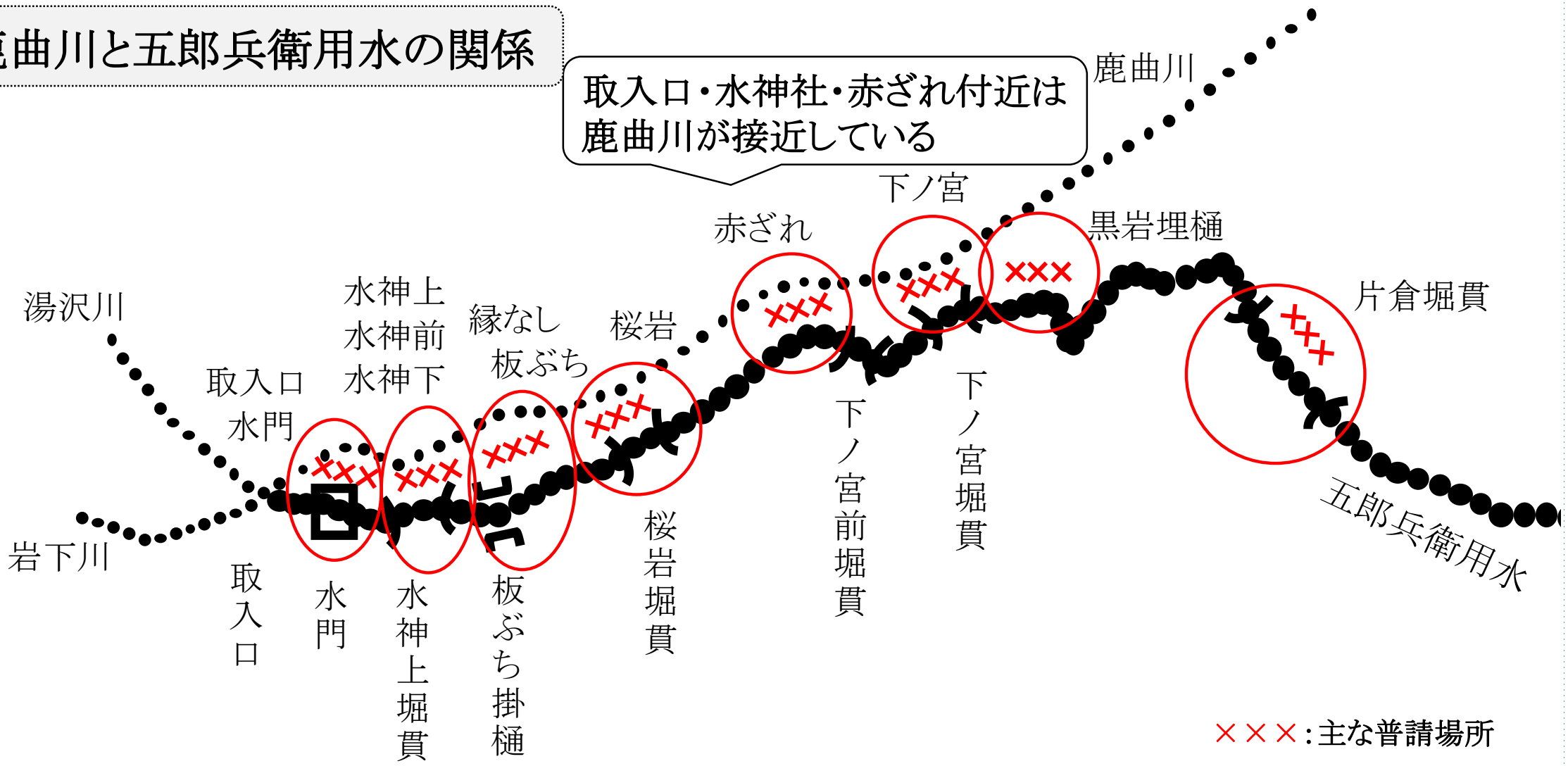


図2-1 五郎兵衛用水路のイメージ(明治27年作成図を引用)

2. 五郎兵衛用水と普請場所(2)

布施川と五郎兵衛用水の関係

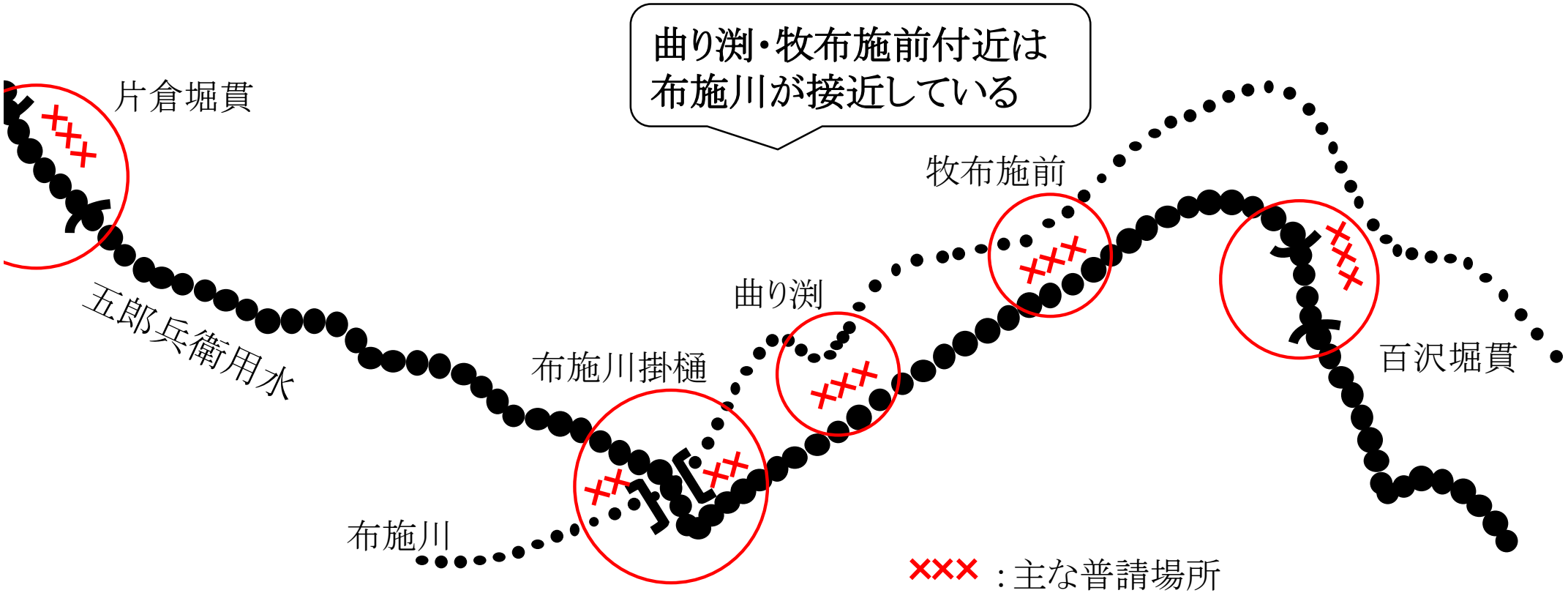
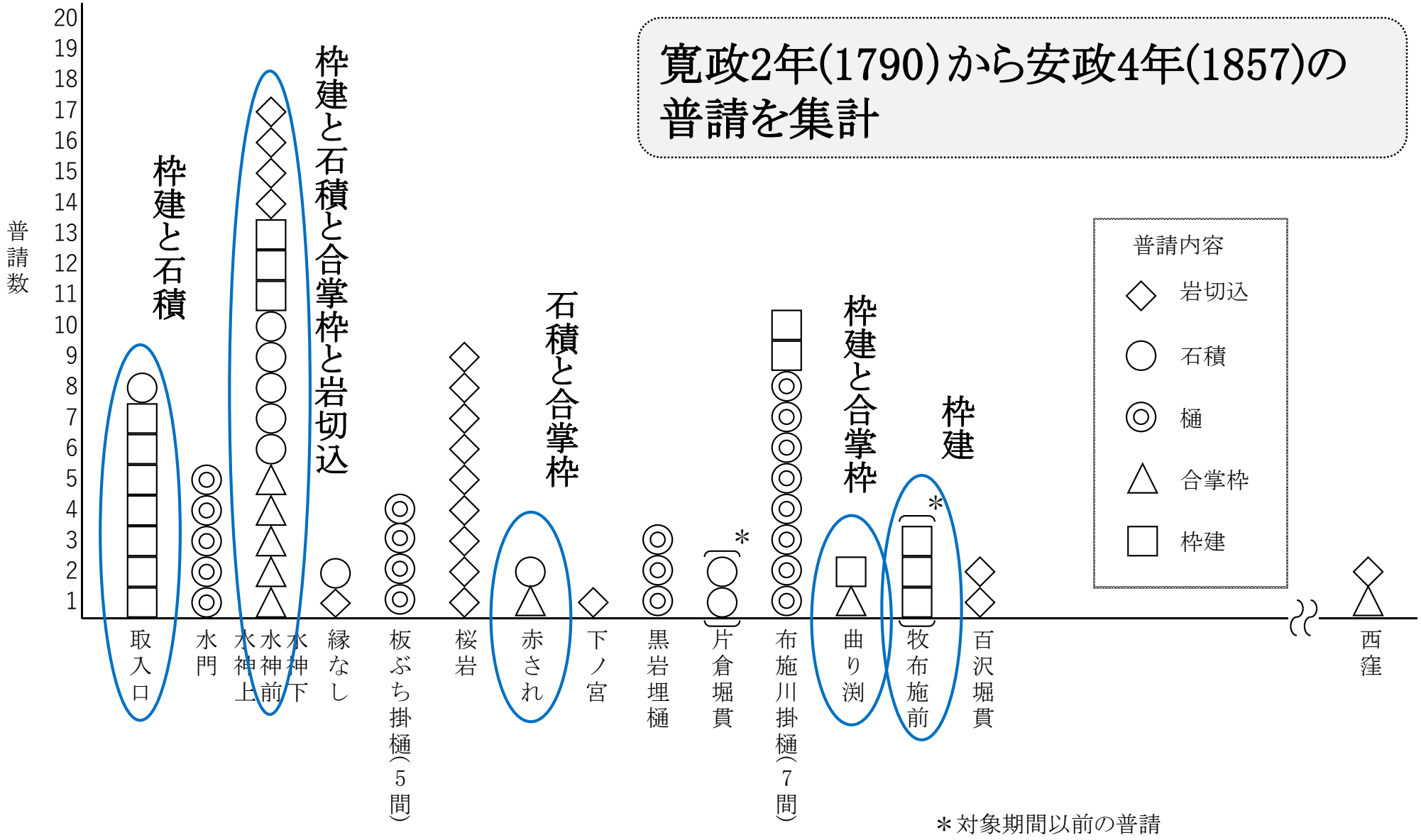


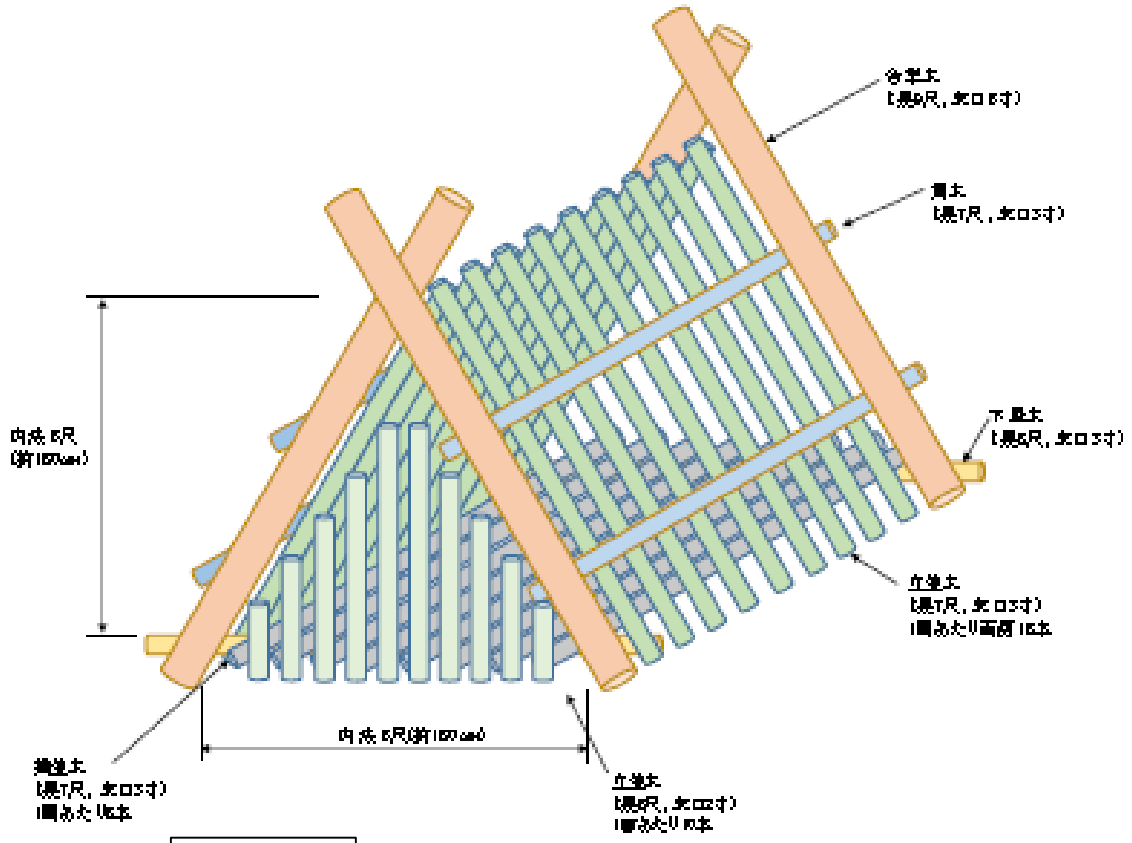
図2-2 五郎兵衛用水路のイメージ(明治27年作成図を引用)

3. 用水の場所ごとの普請件数

寛政2年(1790)から安政4年(1857)の普請を集計

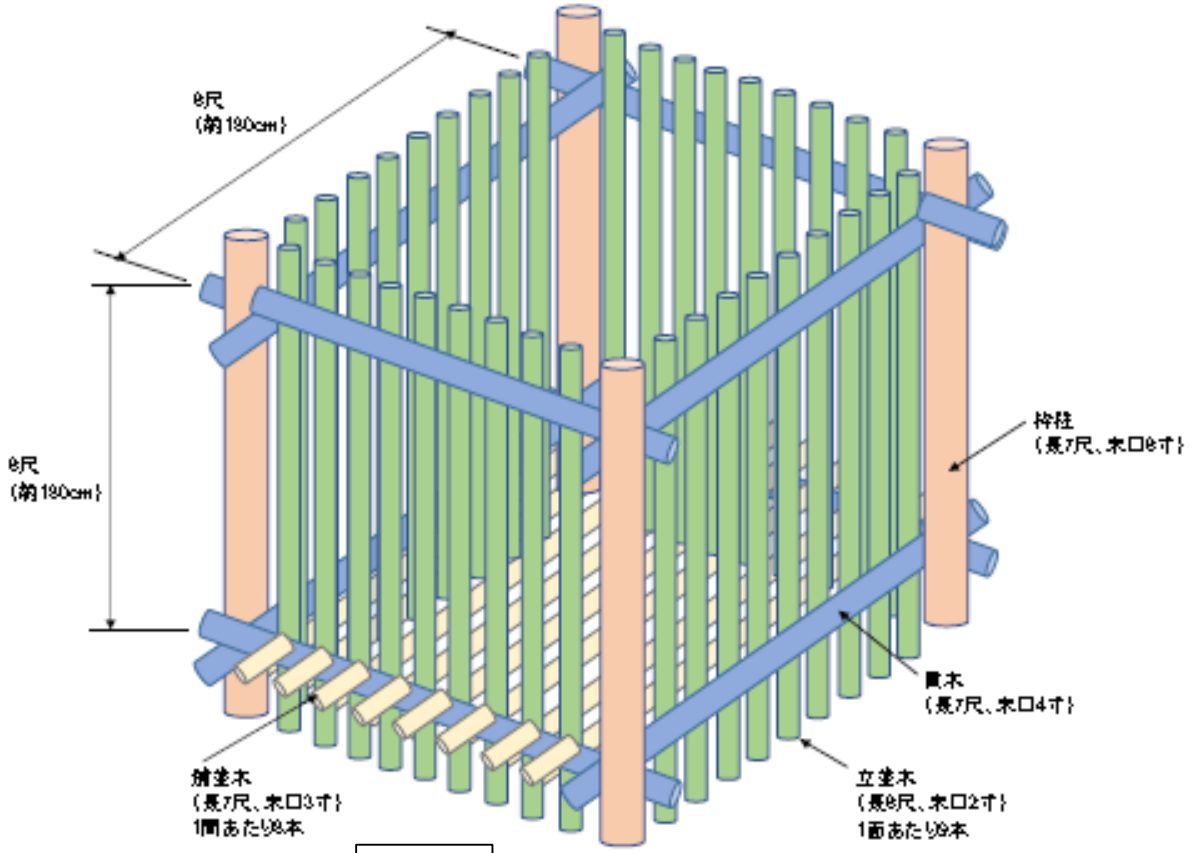


3.1 構造物のイメージ



合掌枠

大きさ
長さ:1間単位(約1.8m)
高さ:6尺(約180cm)
幅　:6尺(約180cm)
＊古文書H3150より



枠建

大きさ
長さ:1間単位(約1.8m)
高さ:6尺(約180cm)
幅　:6尺(約180cm)
＊古文書H3150より

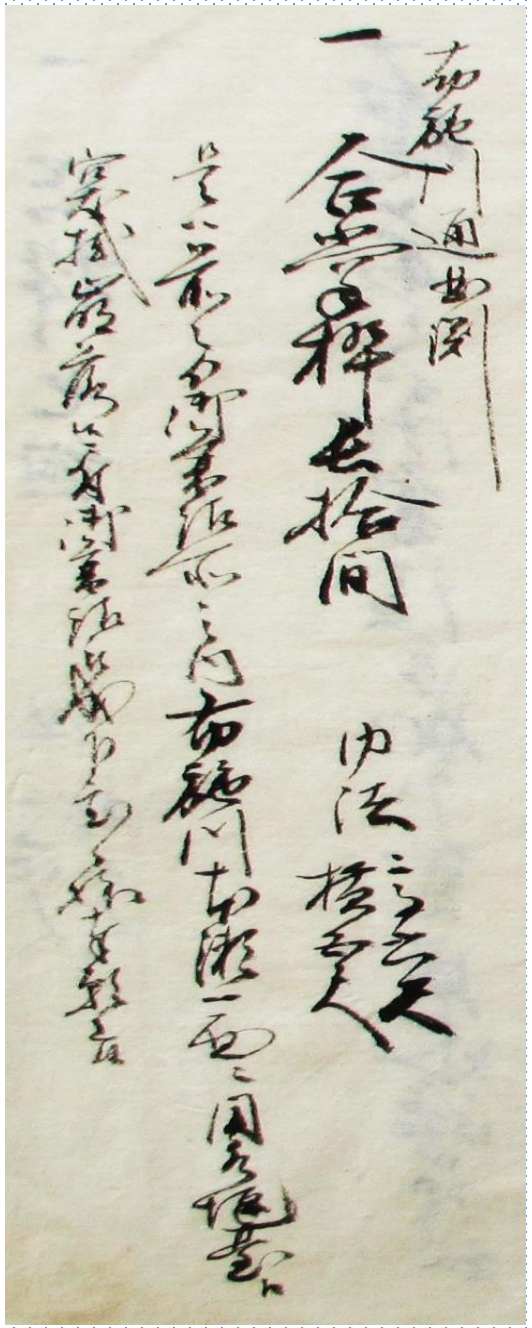
4. 古文書から分かる普請内容

4.1　古文書H3194(文政11年(1828))より

布施川通り曲り渕の
合掌枠普請願い

〈意訳〉
布施川通曲渕は前々より御普請所の内であり、
布施川本瀬が一面に用水堰台へ突きかかった
ため、崩れ落ちてしまったので、御普請をして
くださいますようお願い申し上げます」

布施川通曲渕
一合掌枠　長拾間　　内法　高六尺　横五尺
是八前々ゟ御普請所之内、布施川本瀬一面ニ用水堰台江
突掛崩落候ニ付、御普請被成下置候様奉願上候



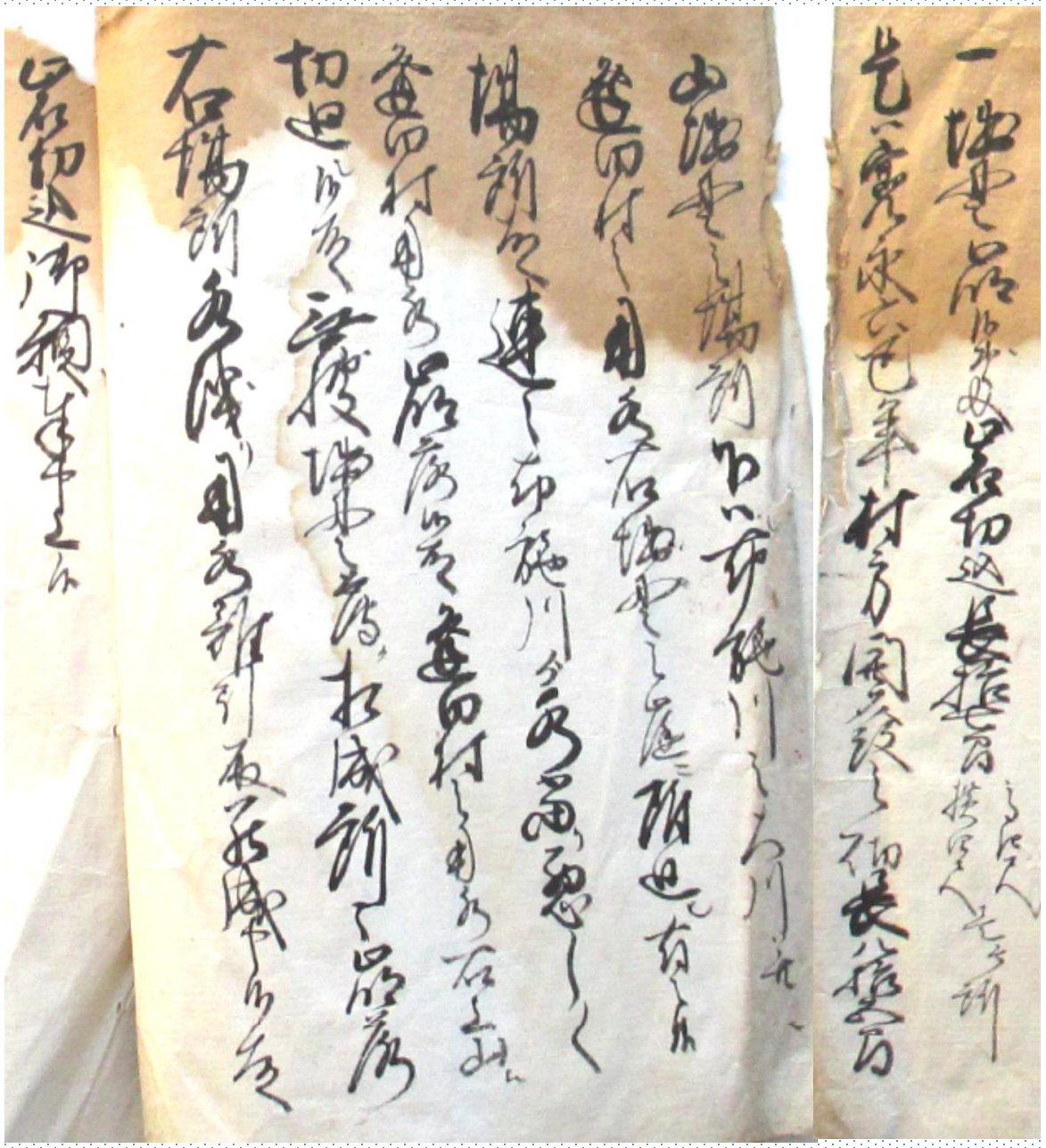
4.2　古文書H3158(寛政6年(1794))より

百沢堀貫の岩切込普請願い

一堀貫崩候処岩切込　長拾七間　高四尺　横四尺　壱ケ所
是八寛永六巳年村方開発之砌、長八拾五間
山堀貫之場所、下八布施川之大川并ニ
蓬田村之用水右堀貫之岸ニ附廻シ有之候
場所故、連々布施川ゟ水当り悪しく
蓬田村用水崩落候故、蓬田村之用水右上山江
切廻シ候故、無拠堀貫薄ク相成所々崩落
右場所水洩リ用水難引取罷成申候故、
岩切込御願奉申上候

〈意訳〉
「百沢堀貫では、蓬田村用水と近いため蓬田村用水が布施川の大水で破壊されそうになると山側に近づき、堀貫の壁が薄くなってしまい、所々崩れ落ち水漏れになり、用水が引取れなくなってしまいますので、岩切込をお願い申し上げます」

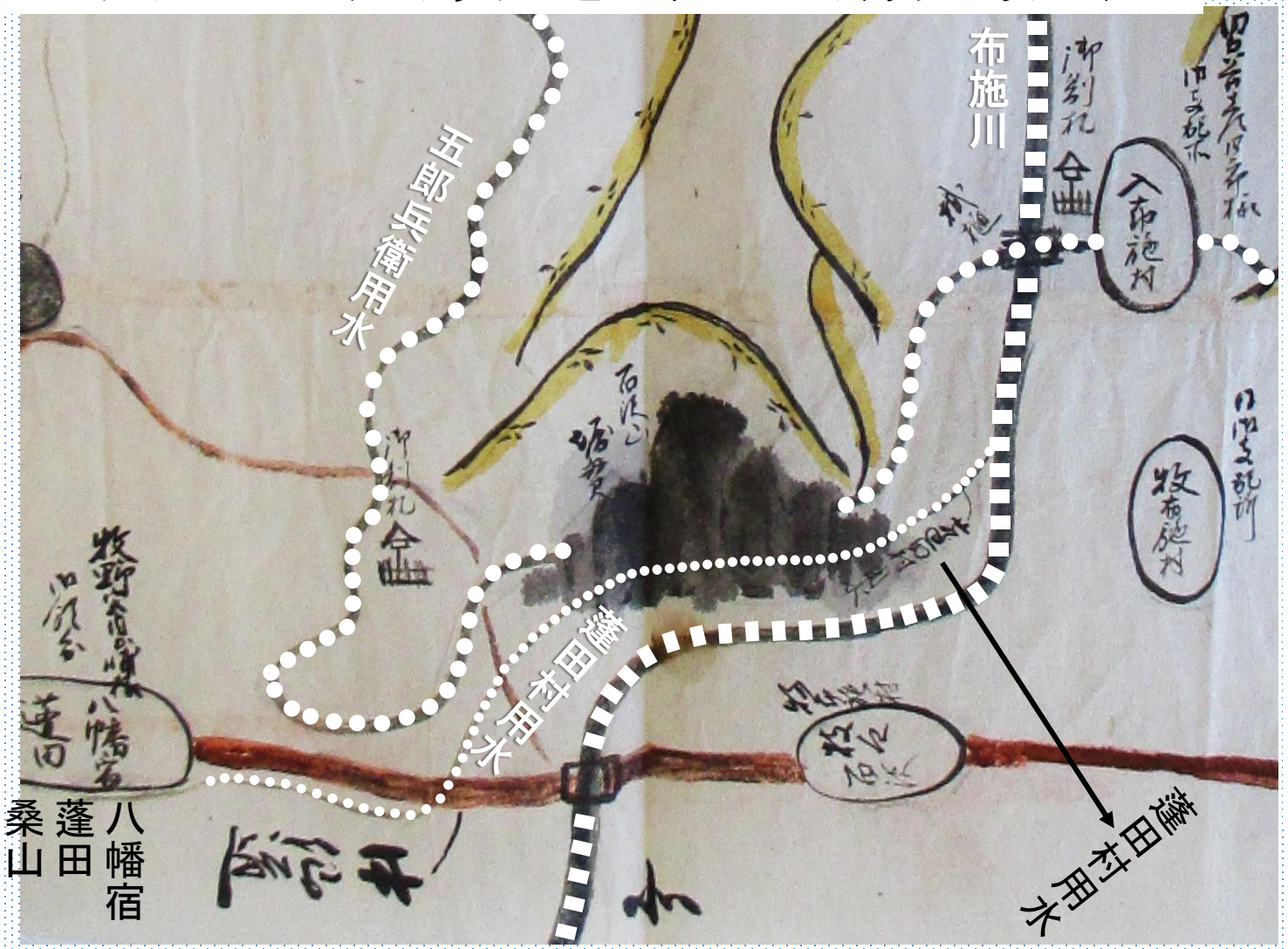
次ページの絵図参照〉



～古文書調査報告書第15集より～

4.3 江戸時代（文化～文政年間）の絵図

（H3281絵図より百沢堀貫と蓬田村用水部分を引用）



五郎兵衛用水は、布施川を掛樋で渡り百沢山を堀貫で通過します。

百沢山の北側には布施川と並行して蓬田村用水が通っています。蓬田村用水が布施川の大水で破壊されそうになると、百沢山に近づき、五郎兵衛用水の堀貫の壁が薄くなってしまうので、岩切込が必要になりました。

寛政2年(1790)から安政4年(1857)までの古文書から

＜普請要因として＞

・自然災害～突然の大雨、台風など～

・材料の耐用年数がきて朽ちてしまう

・用水路の土手を守るための補強　　などがあり、

＜普請として＞

・大水による水路破損の修理

・鹿曲川、布施川から用水路の土手を守るため合掌枠、枠建の設置

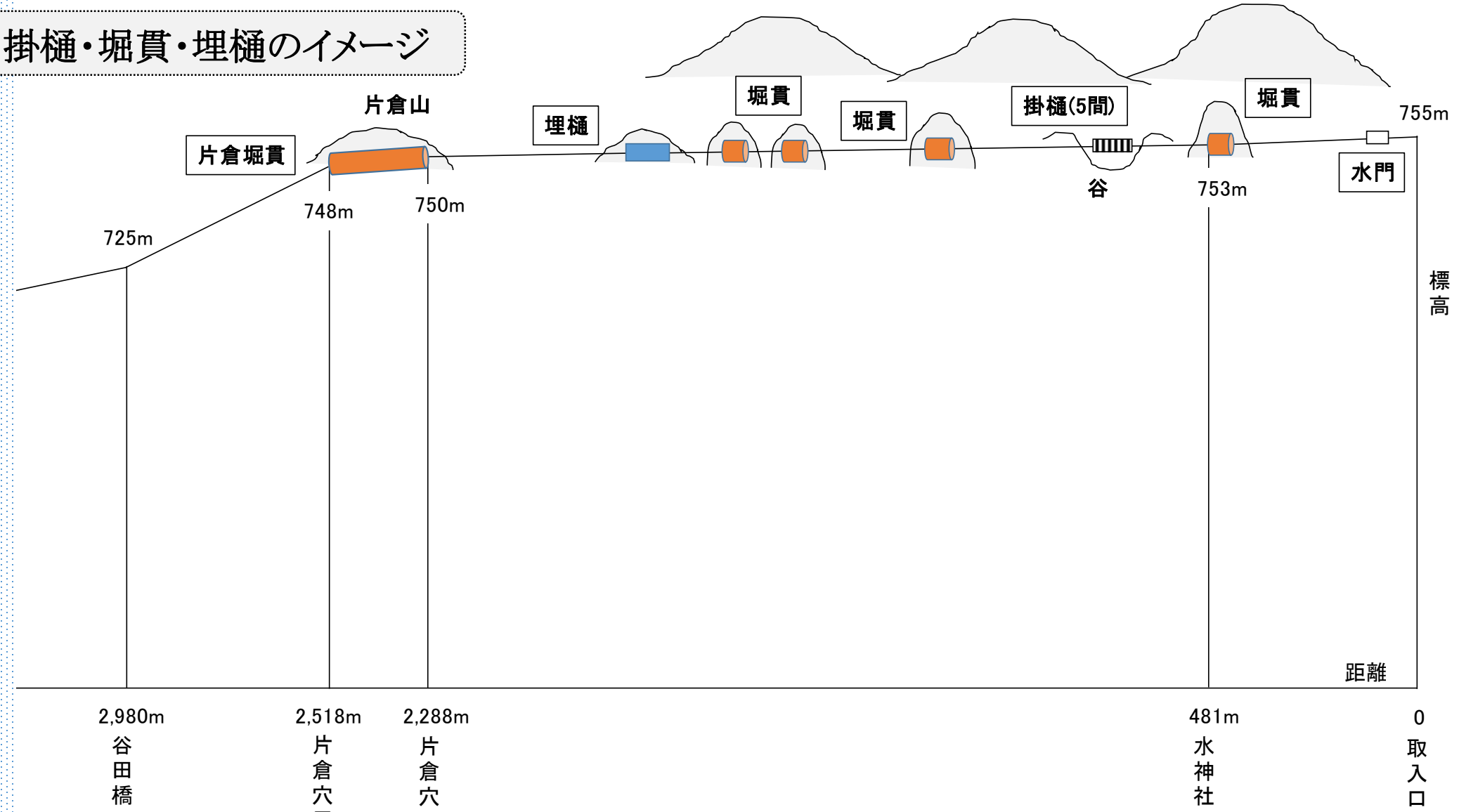
・山崩れ、岩崩れから水路を守る石積などによる補強

・他用水が五郎兵衛用水に近づくと、堀貫の壁が薄くなってしまうので岩切込作業　　などを行いました

完

参考資料　五郎兵衛用水の断面高低差(1)

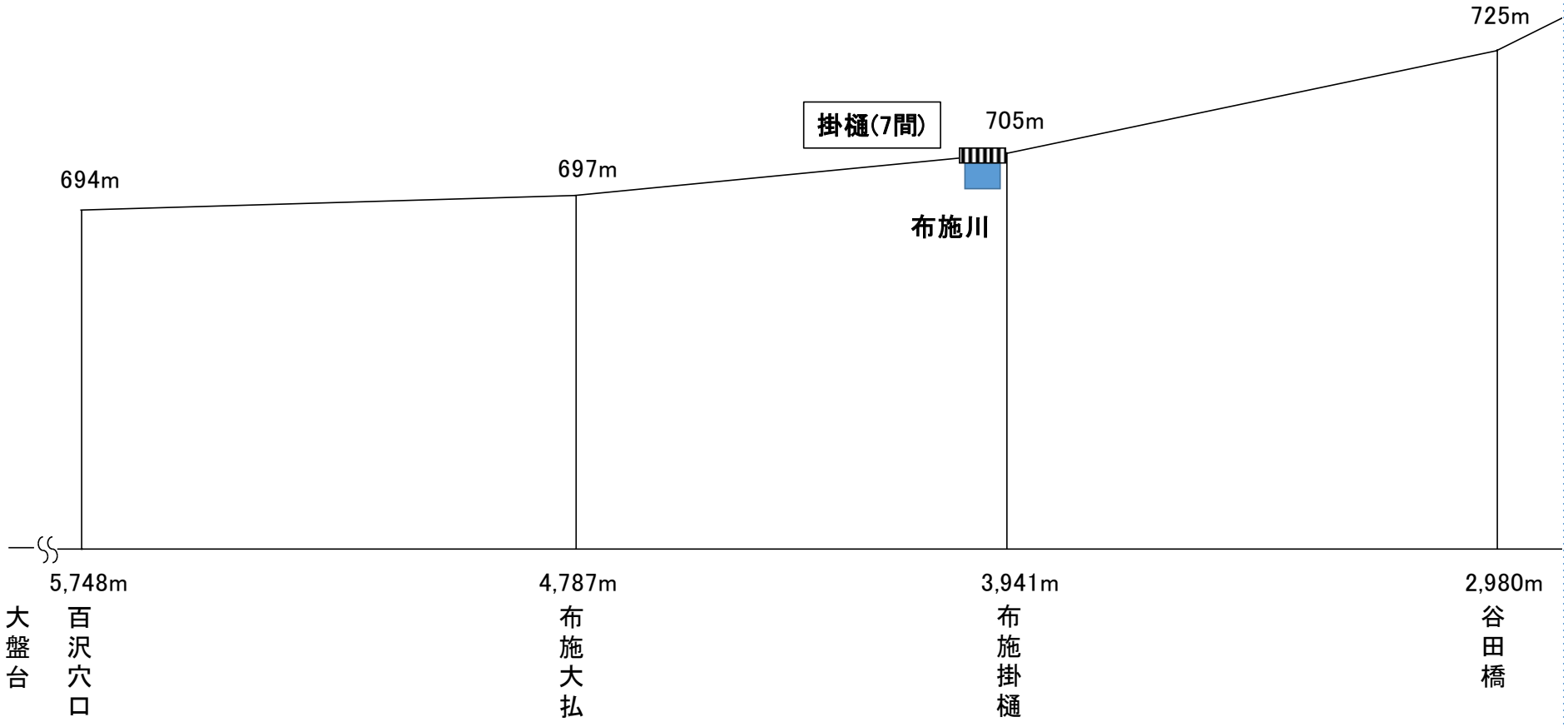
水門・掛樋・堀貫・埋樋のイメージ



柳澤鴻治氏測量(昭和26年)

参考資料　五郎兵衛用水の断面高低差(2)

掛樋のイメージ



柳澤鴻治氏測量(昭和26年)